小森はるか＋瀬尾夏美 アーティストトーク＆ミニワークショップ

ことばのいばしょ
Places of Words

映像作家の小森はるかさんと、アーティストの瀬尾夏美さんによるアートユニット「小森はるか＋瀬尾夏美」。展覧会「ことばのいばしょ」では、「みえる世界がちいさくなった」という展示テーマのもと、SCARTSスタジオで映像作品を中心とした展示、SCARTSモールCで「コロなか対話の広場」を展開しています。お二人のアーティストトーク＆ミニワークショップのレポートをお届けします。

8月23日（日） 14:00〜15:30　SCARTSモールC

テキスト：松田仁央　撮影：リョウイチ・カワジリ

トーク会場のSCARTSモールC「コロなか対話の広場」は、瀬尾さんが4月から毎日SNSにあげていたドローイングと短い文章による《コロなか天使日記》や、仙台にある「book cafe火星の庭」が選書を担当した《コロなか文庫》、コロナ禍に見舞われたこの数カ月の毎日の出来事を記録した年表、対話のためのテーブルなどで構成。展示物を通して来場者がこの状況下での自分自身を振り返り、誰かと話をするための空間です。会場周囲のベンチで休んでいる人たちも何気なく耳を傾けられる開かれた雰囲気の中、二人のトークはスタートしました。

前半は、これまでの二人の活動と、本展に出品している作品について駆け足で紹介。「私たちが基本的にやっていることは、誰かの言葉を書くということ。そのために話を聞く場をつくり、そこで生まれた語りを記録し、それを物語や映像作品として描きなおす。そして、映像、テキスト、絵画などで構成した展覧会という場で、鑑賞者の方々と対話をする。その対話自体をまた記録する。自分たちにとって展覧会は一つのメディアのようなもので、そこで生まれた語りをまたどこかへ届けられるといいなと考えています」と話します。

小森はるか

SCARTSスタジオの展示は、「東京スーダラ2019－希望のうたと舞いをつくる」という展覧会に出品した6つの映像作品と、新作映像1点、関連するテキストやドローイングで構成。「いつの間にか”震災後”から”オリンピック前”へと移行してしまった東京の時間を前に、一度立ち止まって、未曾有の出来事で気づいたはずのことを考えたかった」と瀬尾さん。平成生まれのリサーチメンバー4名と月に一度会って、多いときには8時間ほど対話するというプロセスを重ねて制作された映像作品には、リサーチメンバーが選んだ相手と一緒に、他のメンバーが書いた「震災」「家」「友だち」をテーマにした文章を読み、会話する様子が収められています。そして、新作の映像作品は、「オリンピック前」から「コロナ禍」へと変容した時間の中で、改めてリサーチメンバーと対話のワークショップを行い、この状況下での彼らのリアリティを映し出したもの。「彼らから語られる言葉には、個人の話と割り切ることのできないものがたくさん出てきているので、ぜひ見ていただけたら」と結び、トークが終了しました。

SCARTSスタジオ展示風景

瀬尾夏美

後半は、リサーチメンバーとのワークショップでも使用した「コロなか研究ワーク セルフチェック編」を使ってミニワークショップ。1月から現在に至る気持ちの変化を折れ線グラフにしたり、印象に残った出来事や背景について記入したあと、3人1組のグループを作り、グラフをもとに会話する時間が取られました。

「お正月明けの呑気な気持ちのまま、コロナのことも違う国の出来事と思っていたら、2月28日の緊急事態宣言でいきなり我が身のことになって戸惑った」「仕事がなくなって、5月は初めての長期休暇になったけど、おかげで部屋の整理がすごく捗ったから良い時間だったのかも」…

書き手の自分も参加しましたが、初対面にもかかわらず意外とスムーズに、時折「トイレットペーパー、見事に店頭からなくなってましたよね！」と盛り上がり、あっという間に時間が経過。同じグループの人たちと「決して楽しいネタではないけれど、こうやって人と話すのはやっぱりいいですね」とうなずき合いました。

最後は、改めて今、人と話したいと思うキーワードやテーマをカードに書き込み、全員でシェアして終了することに。

「自分のことは自分で決める」「人との距離」「自粛を要請ってどういうこと」「他者への想像力」「ゆっくり自分と向き合う」…

キーワードが出てきた背景はさまざまですが、どこか根底でつながっているような言葉が挙げられていきます。「一つのキーワードで30分話すだけでも、相当深めていける」と瀬尾さん。対面のコミュニケーションが制限されるという時間を経験しているからこそ、「人と出会い、話し、聞く」行為が心に沁み入るように感じられるとともに、日々の生活の中で「個人的なこと」と流してしまいがちな気持ちや考えは、こうやって語る場を得ることで他者と深く共感し合えるものになる。そんな気づきをもたらすトークとワークショップでした。

※「コロなか対話の広場」では、会期中、SCARTSアートコミュニケーターによる小さな対話の集まりも計画中です。SCARTSアートコミュニケーターの活動については、こちらをご覧ください。

https://www.sapporo-community-plaza.jp/artcommunicator.php

小森はるか＋瀬尾夏美 | Komori Haruka+Seo Natsumi

小森はるか（映像作家／1989年生まれ）と瀬尾夏美（アーティスト／1988年生まれ）によるアートユニット。2011年3月、ともに東北沿岸へボランティアに行ったことをきっかけに活動開始。2012年より3年間、陸前高田市に暮らしながら制作に取り組む。2015年、土地と協働しながら記録をつくる組織、一般社団法人NOOKを設立し、仙台に拠点を移す。現在も、風景と人びとのことばの記録を軸に制作と発表を続けながら、対話の場づくりを行っている。おもな展覧会に「記録と想起－イメージの家を歩く－」せんだいメディアテーク／仙台（2014）、「キオクのかたち、キロクのかたち」横浜市民ギャラリー／神奈川（2017）、「第12回恵比寿映像祭」東京都写真美術館／東京（2020）など。巡回展「波のした、土のうえ」は、陸前高田など全国10カ所で開催。

松田仁央 | Matsuda Nio

ライターとして札幌の芸術文化を中心に取材・執筆。2017〜2019年にはEU・ジャパンフェスト日本委員会やボランティア・ブリッジ・プロジェクトの助成を受け、シビウ国際演劇祭や欧州文化首都マテーラでの数週間のボランティア・プログラムに参加。2019年5月には「札幌市こどもの劇場やまびこ座」プロデュース人形劇『OKHOTSK オホーツク 終りの楽園』東欧3都市ツアーに同行し、取材と通訳補佐等を行う。NPO法人S-AIRでの2年間のアシスタント・ディレクター業務を経て、2018年からウイマム文化芸術プロジェクト事務局。